
英語のコミュニケーション能力とその評価について

山名豊美

0. はじめに

英語学習の主たる目的が、英語によるコミュニケーション能力の獲得であり、英語教育の目的も、そのような能力を育成することであるとすることに今や異論を唱える者はそう多くはないであろう。そのような目的に沿って、多くの教材が用意され、授業においても、英文を日本語に置き換える作業を中心とする文法訳読形式から、リスニングやスピーキングに重点を置く、いわゆるコミュニケーション・アプローチ的な発想を用いたものになりつつある。しかしながら、いざ評価しなくてはという時になって、どのような試験をすればいいのか、困ることが多い。結局のところ、今までどおり、部分訳や穴埋め問題などを適当に組み合わせたもので、学力を測るということになってしまう。テストを受ける側も心得たもので、どのような授業形態をとろうとも、テスト前になれば、どこから出題されるのかを知るために最大限の努力を払い、後はひたすら解答を暗記するという行動に出る。これでは、一体、何の学力を測定し、評価しようとしているのか、作る方も受ける方もよく分からないまま、なんとなく試験を作り、受けているというのが実状ではないだろうか。コミュニケーション能力とはどのような能力を指すのか、コミュニケーション能力の育成を主眼とした語学教育でのテストは、どのようなものであるべきなのか。現状での整理を試みてみたい。

1. コミュニケーション能力とは何か

コミュニケーションという言葉が指す内容は広くはミツバチやアリの情報伝達手段まで含むこともあるが、ここでは、人間の言語を使った情報伝達行為としよう。人間同士が互いに意思の疎通を行うためには、通常、言語が用いられる。表情やジェスチャーなど、言語外の要素がコミュニケーションに果たす役割も無視することはできないが、言語が担う情報の質や量を考えると、別種のものと考えなくてはならない。

英語に限らず、外国語を使ってコミュニケーションをとる場合、発音や文法などが母国語と異なる体系を持つ言語を使って、情報を交換しなくてはならないという障害がある。これまで、外国語を学ぶということは、主にそれらの体系を学び、習得するという過程であった。しかし、それらの形式的な操作にいくら習熟しても、実際のコミュニケーションの場で生かすことができないことが多かった。なぜそうなるのかと言えば、文の意味を理解し、発音ができたとしても、実際の場面ですそれを適切に使うのに必要な運用能力が形成されていないからである。Krashen(1982)でいうとこ

ろの、文法知識は、いわゆる「モニター」としてしか働かないという例である。

ごく簡単な例で考えてみよう。例えば、“Would you like to go to the movies?”という質問に対して、“That’s great.”というような表現が可能であるということは、文法形式から類推することはできない。文法形式重視の学習では、“Would you like to ...?”に対する答えとして、“Yes, I’d like to.”しか思い浮かばなくても不思議ではない。ある表現が適切か、適切でないかを判断するには、形式的な文法知識に加えて、運用的な知識が必要不可欠であるということが出来る。“Would you like to ...?”という疑問文が単に相手の希望を聞いているのではなく、しばしば、何かを提案する時に用いられる表現であることを理解し、それに対して自分も賛成である時に、“That’s great.”という返事ができるということを知らなければ、このような簡単な会話すらもできないのである。

人間のコミュニケーションにあっては、文法規則によって導き出される文そのものの意味と、その文が発せられる場によって様々に変化する、いわば、心理的な意味の総合的な解釈が必要である。しかし、通常、母国語によるコミュニケーションの場合は、そのような重層的な意味の構造をあまり意識することがない。われわれは、母国語を使用している時、無意識的に、文そのものの意味を取り違えることがないと考えている。英語で“What do you mean?”と言ったり、日本語で「それはどういう意味ですか。」と言ったとしても、相手の発した文の意味そのものが本当に分からないのではなく、大抵の場合、相手の言ったことに対して不愉快だったり、敵意が感じられたりした時に使われる表現であるのは、承知のとおりである。

母国語とは違って、外国語によるコミュニケーションでは、語彙や構文に関する知識が不足していることによって、相手の言っていることが理解できないことがしばしば起きる。しかし、そんな時でも、もう一度繰り返してもらったり、易しく言い換えてもらったりすることによって、コミュニケーションを成り立たせることができる。実は、そういう対処の仕方は母国語の場合でも頻繁に起こることであり、そうでなければ、幼児など言語習得の途上にある者のコミュニケーションは、成立しないことになってしまう。外国語というハンディキャップはあるにせよ、言語によるコミュニケーションの成立過程は、母国語と同様であり、自然な言語使用を通じて得られるコミュニケーション能力の獲得こそが、あらゆる段階での言語学習の目的と考えてよい。

2. コミュニケーション能力のテスト

相手の話の内容を的確に理解し、適切な応答を返すというのが、コミュニケーション能力であるとするならば、それを実際に行なって、その能力を判定するのが、最も望ましいテストであると言える。例えば、面接テストをして、その内容に応じて点数をつけるというようなものが考えられる。しかしながら、このようなテストを多人数の受験者に対して行なうのは、時間がかかり過ぎたり、公平性を保つのが困難であったりして、あまり現実的ではない。そこで問題となってくるのが、従来から行なわれている筆記試験の中で、いかにして、コミュニケーション能力を測るかということである。

これまでも、試験の中で、リスニング問題や会話形式の問題を与えるなどして、少しでもコミュニケーション能力が反映するような配慮がなされてきた。しかしながら、内容まではあまり注意が払われていないと思われるものが少なくなかった。実際の例をいくつか見ながら、コミュニケーション能力を測るテストのあるべき姿について考えてみたい。

2-1. 文法項目テスト

外国語のテストとして、今まで最も多く出題されてきているのは、文法項目に関するテストであろう。最も初歩の段階の単数形と複数形の区別や be 動詞の適切な形を答えさせるものから、時制や接続詞の用法というような問題へと、徐々に難しさをましながら、あらゆる学習段階でテストの主要な部分を占めていると言ってもよい。

例えば、時制に関して、次のような出題がある。

例 1.

問題：次の各文の()内から適当な語句を選びなさい。

(1) The children (plays, play, played) in the park in those days.

(2) She (drunk, drank, drinks) three cups of coffee last night.

(3) I (will eat, ate, eat) lunch in the cafeteria every day.

ここでは、言うまでもなく、(1)から順番に、in those day, last night, every day という副詞句が動詞の時制を制限していることが分かれば、正解を導くことができるのだが、コミュニケーション能力との関連性は低いと言わざるを得ない。文法を中心に正しい英語を身に付けることを主眼にしてきたわが国の英語教育の中では、それなりの意義があり、これからも、全くなくなってしまうとは考えられないが、コミュニケーション能力の育成を主眼にした言語教育の中では、文法の知識を項目別に測定するというテストは、あくまでも、基礎学力の確認の範囲に留めるべきであろう。

2-2. リスニングテスト

リスニングテストについては大学入試センターによる試験でも導入が検討されているように、コミュニケーション能力を測るテストでは必要不可欠と言ってもよい。にもかかわらず、定期テストなどで今までリスニングテストがあまり行なわれてこなかった理由の一つは、よく言われているように、放送設備など実施に伴う制約があるせいだろうが、もう一つ、大きな理由として、ネイティブスピーカーの不足があると思われる。試験問題を自分たちで作ろうと思えば、どうしても身近にネイティブスピーカーが欲しいと思うのは当然だろう。いずれ外国語教師のなかにネイティブスピーカーがいて当然という時代が来るかもしれない。しかし、現に身近にいない場合には、手元にあるテープ教材を使うか、教師自身がモデルとなって録音するしかない。教材用テープの場合は、テストに使うことを前提に作られていないことが多いので、編集作業が必要だったり、普段から心がけておかないと、テストにふさわしい内容のテープを見つけるのが困難だったりするかもしれない。それぐらいだったら、たとえネイティブスピーカーでなくても、自分たちで作成したほうが良いと考える人もいるかもしれない。ネイティブスピーカーでも多少の方言が残っているのが普通であることを考えれば、日本人的な「なまり」が少しぐらいあっても良しとすべきであろう。普段から、教師自身が英語を使って授業をしていれば、テストの時に聞いても生徒は違和感を持つことはないだろう。それに英語について言えば、通常でも英米人以外の人間が話す英語を聞かしておくのも国際化の時代には、むしろ、好ましいことかもしれない。

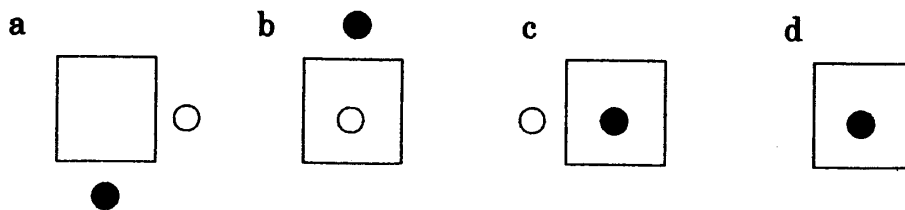
どのような試験でも言えることだが、リスニングテストで注意しなくてはならないのは、試験が

純粋にリスニング能力を判定できるような内容になっているかということである。例えば、リスニング問題とは別に印刷物で文を与えて正誤を問うような試験では、解答を導くのに、部分的にリーディング能力が関係してしまい、純粋な意味でのリスニングテストとは言えない。それを防ぐための手立てとしては、絵をいくつか用意してその中から正答を選ばせたり、解答が数字や記号になるような問題を作ったりすることが考えられる。Heaton(1975)には、次のような例が出ている。

例2.

(指示文)

Look carefully at each of the four diagrams. You will hear a series of statements about each of the diagrams. Write down the appropriate letter for each statement.



(問題文)

- 1) A white circle is inside a square.
- 2) A black circle is above a square.
- 3) A circle is on the left of a square.
- 4) Neither a white nor a black circle is in a square.
- 5) A black circle is under a square.

(以下略)

指示文の中にやや難しい単語が出てくる以外は単純明快な内容の問題であり、inside や above などの前置詞や、neither...nor という接続詞を理解できるかということ測ることができる。

また、やや上級の問題として、一定の長さの文を聞かせた後で、別の短文をいくつか聞かせ、内容が前の文と一致しているかどうか問うような形式も考えられる。いずれにしても、ただ単に筆記試験の飾り物のように行なうのではなく、純粋にリスニング能力が反映されるような問題を一定量与えることによって、学習者の能力を正しく評価すべきである。そうでなくては、語学学習において、リスニングがいかに重要かということを学習者に伝えることはできない。

2-3. リーディングテスト

リーディングに関するテストは、従来、コミュニケーションとは異なる見地から実施されてきた。それは、英語(外国語)教育の最大の目的が、文献を読む力を養成することであったことから、必然的に生じてきたもので、外国語文献を日本語に訳す能力が最も重要視されてきたのである。しかしながら、コミュニケーション活動の一部としてリーディングを考えると、これまでのテストには色々な点で問題がある。

まず、第一に問題としなくてはならないのは、リーディング能力を純粋に測ろうとしているテストがあまり多くないということである。一定量の文を読ませた後、その内容に関連した設問に答え

させるという形式のテストが最も一般的なテストの形ではないかと思うが、その多くは空所に適語を入れさせる問題や一定部分を日本語に直させるといった問題である。そのような形式のテストにも、それなりの価値はあるだろうが、その多くは、全体の読解能力とは無関係の、語彙や構文のレベルの設問であることが多い。空所補充の形式の代表的なテストであり、総合的なリーディング能力との相関性が高いとされているクローズテストもリーディング能力の測定という点では、間接的なものと言える。リスニングテストの項目でも述べたように、リーディングテストというからには、リーディング能力をなるべく純粋に測ることができるような問題を考えるべきである。そうでなくては測定した結果を正しく評価し、その結果を次の学習にフィードバックするというテスト本来の目的を達成することはできないだろう。

リーディング能力を測るテストを作る上で最も大切な点は、人間が自然に文を読むプロセスを阻害するような設問を作らないことである。例えば、文中に空所を作ったり、語句を並べ替えさせたりすれば、その部分の構文の理解力を測るには有効かもしれないが、全体の読解力を見る上では、むしろ、マイナスになる。リーディング能力そのものを測るには、一定の長さの文章全体を読ませた上で、中に含まれている情報をどれくらい正確に捉えているか分かるような設問を作らなくてはならない。具体的に言えば、リスニングテストの問題文をそのまま、文字にして与え、その後で、用意された答えの中から内容に一致しているものを選ばせるといった形式のテストが考えられる。リスニングとリーディングは、音声と文字という違いがあるにせよ言語による情報を得るプロセスとしては、同一であると考えれば、テストの形式も似たものになって当然である。リーディングテストでの空所補充が不自然な形式であるのは、リスニングテストで同じことをしたらどうなるかということを考えれば、おのずと明らかであろう。

3. まとめ

文法形式を重視した従来の語学教育ではリスニングやスピーキングといった音声面での訓練だけでなく、リーディングやライティングなどの面でも、学習者が満足できる能力を与えることができなかった。その反省の上になら、コミュニケーション能力の育成を主眼とした語学教育が開発されてきたが、学力の測定や評価ということになると、従来の文法形式主体のテストに戻ってしまうことが多い。テストや評価には、信頼性や公平性といった要素を考慮しなくてはならないのは、もちろんであるが、それだけでは、学習を促進するようなテストにはならない。入学試験や卒業試験といった個々の性格的な違いはあるにせよ、テストが正しく能力を測り、評価するという目的をもつ限り、これからもより一層の改善努力がなされるべきであろう。

参考文献

- Heaton, J. B. 1975, *Writing English Language Test*, Longman.
- Hughes, A. 1989, *Testing for Language Teachers*, Cambridge University Press.
- Krashen, S. D. 1982, *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Pergamon Press.

On Communicative Competence and Its Evaluation in English

Toyomi Yamana

It has been widely admitted that language is essentially a tool for communication and the prime need of most learners is not for a grammatical knowledge of the language, but for an ability to communicate in that language. During the past decade or so, many textbooks and teaching materials have been developed for communicative purposes. However, the development of communicative test seems rather slow and language teachers are still under the influence of old-type grammar oriented tests. In this paper we consider some of the basic ideas of communicative competence and its evaluation system. Although it is still impossible to present the whole set of questions for a communicative test, some of the points in making communicative tests are discussed.

Key words: communicative competence, communicative test, evaluation system.